

平成28年11月1日

日本人と縄文の心

小林達雄 国学院大学名誉教授

今日は、縄文の魅力がこの地を訪れる皆さんによく知ってもらうために、縄文文化においてどんなことが大切なのかをお話しします。それを知っていただいてこそ縄文時代に素晴らしく栄えた八ヶ岳山麓を案内していただくことができると考えています。

定住と土器

今から約15,000年前、世界中のいたるところで、それまでの遊動的な生活から定住を始める新石器時代と呼ばれる時代になりました。我々の祖先である縄文人は、そこで初めてイエに住みムラをつくり、動物たちとは違う空間を確保して暮らします。

日本で発掘された一番古い土器は、15,000年以上前のものがあり、世界一古いとは言いませんが、日本列島の縄文人が世界の土器レースの先頭集団にいたことは確かだと考えられています。土器というのは、ただ土を固めればできるというものではありません。粘土を探して掘り出し、精製してねかして熟成させてからでなければ土器

を創り出すことはできません。そして、完成したら十分に乾燥させてからたき火で焼きます。

相当な時間と手間暇をかけないと作り上げることができません。遊動的な生活をしていては全く不可能な事ですから、定住生活が営まれていたことがわかります。

縄文姿勢方針

縄文人が作ったイエがあるムラの外には、ハラが広がっています。

ハラは人工的なものではなく自然的秩序が維持されている縄文人の食糧庫であります。また、生活に必要な道具の材料もハラにいっぱいあってそれで道具を作っていたわけです。

どんなものを食べていたのかの全容はなかなか分かっていませんが、煮炊きに使われていた土器の内側のオコゲや水気の多い地層から出土したもの、貝塚などの分析によると、多種多様の植物や動物を食べていたことがわかっています。

この多種多様な植物資源の開発・利用を、私は『縄文姿勢方針』と呼び、たいへんに重要なことだと考えています。



縄文カレンダー
(小林原図・新潟県立歴史博物館提供)

名づけ=コトバの基本的機能

でも、腹が減ったら何でも食べるという生活だったら、毒のモノもたくさんあるわけですから、みんな死んでしまいます。

まずは食べられるものを見極めて、毒で食べられないものや、なんだかかわからないものを区別しないといけません。そのためには『名づけ』をしないといけません。名前によってみんなの共通した認識

になるからです。これはコトバの基本的な機能です。

どこにいつ生えているのか、いるのか、そして、どうやって食べるのかいろいろなことがコトバによってかなえられています。

ハラの役割

ムラから一步出たハラは、多種多様な植物が生え、いろいろな動物が動き回っている空間です。そこは縄文人によって『名づけ』されたモノたちでいっぱいになっていて、その空間こそが縄文人の論理が働く空間になっていたのです。

ハラに存在するものは、ただそこにあるだけというものではありません。みんな物言う草木であり、精霊を宿しているものとして存在して縄文人と関係を結んでいるものなのです。

これは、日本人の心の中にある八百万の神の世界や、神道的心につながっているものなのです。

世界的な新石器時代と日本の縄文時代との比較

大陸の新石器時代は、『新石器革命＝農業革命』によって、定住的なムラを営む生活になっていきました。ムラの外にあるのはハラでは

なく開墾しているノラ（耕作地）なのです。ハラは目の敵にされ、征服すべきものとして開墾されノラになっていきます。自然は戦って征服するものであるという道を一気に突き進んでいくのです。それをどんどん進み、歴史を先導していきました。

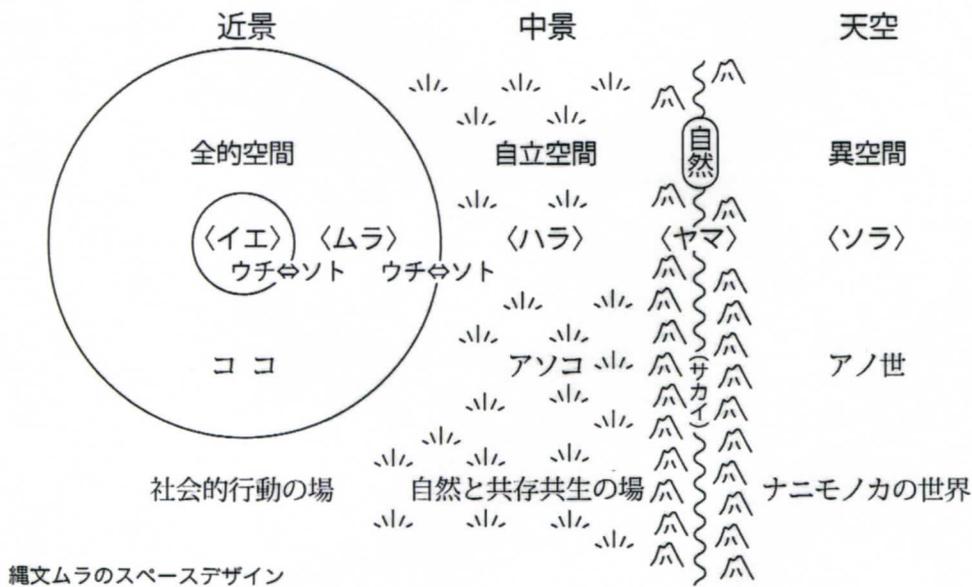
日本列島の縄文文化は新石器時代の劣等生かのように言う人がいますが、決してそうではありません。世界的な新石器時代の歩みとは全く違う、自然を敵対視しない、言わば自然とともに生きていくという『自然との共存共生』の道を歩み続けて、そこから日本にしかない日本独自の文化が培われてきたのです。

ことば＝文化的遺伝子

一万年間という非常に長い縄文時代の中に作られた生物学的な遺伝子 DNA とは別に、生活の中で受け継がれていった文化的遺伝子ともいべきものは『ことば』なのです。日本語はどこから来たのだろうなどという研究者の話を耳にしたことがありますが、言葉はどこからかやってくるものではないのです。ここ日本列島で出来上がってきたものなのです。文化が言葉を生み、言葉が縄文の世界をより豊かにして、それが絶え間なく繰り返されて今の日本にずっとつ

ながっているのです。

縄文文化は世界に類を見ない独自のものであるし、だからこそ個性豊かな縄文語ができてきたのだし、またそれが弛まなく繰り返されて現代の日本の文化や日本語になってきたのです。だからこそ、諸外国の人々が理解に苦しんだりすることもあるものの、世界が注目し、日本に旅する外国人が驚嘆したり称賛する日本独自の文化が形作られてきたのです。



オノマトペ（擬音語、擬声語、擬態語）→ 『自然との共感共鳴』

世界中には6千以上の言葉があると言われていますが、特に日本語には著しい特殊性がいくつかあります。その一つが『オノマトペ』です。これが世界中の言語の中で類を見ない発達をされていて、他の国の言語の追随を許すものではありません。

これが証明しています事は、他の国の言語が経験しなかった日本語独自の歴史を持っているからにほかなりません。これが、『一万年以上続いた、自然との共存共生の縄文文化』があったことによるものなのです。縄文人は、人間の仲間同士とのやり取りだけでなく、縄文人を取り巻く自然の中にあるものすべて「いわば、太陽や月、天気だけでなく、山や岩、川や海、草木や陸上動物から魚など、生きるものすべて。」がもの言う、森羅万象との関係においても言語活動を意識してきた成果なのです。

春の小川はサラサラいくし、雨はシトシト降ったりザアザア降ったりします。また、一歩進んで、面はゆいとか、もの悲しいなどという言葉もほかの言語に訳せないものであります。日本語は他の国の言語と違って『右脳』を駆使して使われる世界中でも最も特徴的な情緒的な言語であると言われてています。

このようなことが、自然との共存共生からもう一歩進んだ『自然との共感共鳴』ともいうべき関係を結んでいた縄文時代のコトバから続くありようで、現代の俳句の心にも通じていると見えるのであります。

縄文人独自の『人間圏』の形成

縄文人が本当に大切にしていたと思われるものにヤマがあります。どんなヤマでもいいというわけではなく、その聖なる山は円錐形や笠形のヤマでありました。縄文時代以降に日本人が大切にしてい続けているヤマに続いていると考えられます。ムラの中は自らが作った人工的な空間ですが、それを近景として、中景にはハラ、遠景にはヤマという構図が出来上がります。ヤマを越えると、よそのクニになります。その向こうにはソラが広がり、アノ世へとつながっていくようです。縄文人の世界観はこのようにして宇宙にも踏み出すありようを呈しているとみることができます。

縄文時代のムラは定点観測地

東京の立川の駅の南側から冬至の日の日没を眺めると、富士山の頂上に素晴らしい日の入りを眺めることができます。縄文人もこのことを大変大切にしていまして、そこから富士山の頂上を結んだ直線上にはいくつもの縄文時代のムラの遺跡が存在しています。もちろんそれ以降の時代に作られた神社などもたくさんあります。縄文時代の人々は夏至・冬至、春分・秋分をしっかりととらえてムラづ

くりやモニュメントという記念物の構築に生かしていたというのは考古学で証明されていることであります。

日の出、日の入りは現代の我々にとっても、心をときめかせる感動の瞬間であります。刻々と空が色を変えて周りの景色もその時の流れとともに移り変わっていく。縄文人も我々と同様に心をときめかせたことと思います。

日本列島に生き続ける縄文文化

今までのお話から、縄文人の心は、現代の我々をとりまく日本の社会の中に生き続けていることがお分かりになったと思います。

このような視点で、もう一度身の回りをよく見ていただくと日本独自の縄文文化が現代の我々の中に脈々と息づいていることを確かめることができると思います。ハヶ岳山麓には、縄文人の手によって磨かれたと思しき尖石という大きな石もありますし、数知れない素晴らしい多くの遺物が発掘されています。縄文時代に暮らした人々に思いをはせ、今日のお話から感じられたご自分の感覚を持っていただいて、皆様と交流していただければ幸いに思います。

(この文章は、平成28年11月1日に、茅野・産業振興プラザにて講演をいただいた内容を要約したものです。)